

## 生物多様性データベース作成課題 事後評価総評

今回は①生態系情報とリンクした生物多様性データベースの作成、②無脊椎動物の標本データベースの作成、③甲虫および訪花性昆虫類データベース、④日本の海洋島に生育する野生植物種の標本データベースの構築、⑤京都大学瀬戸臨海実験所所蔵標本データベース、⑥鱗翅目データベースの6課題について事後評価を行った。各課題の事後評価を見ると、全体として優れた成果を挙げていると判断できる。参加研究機関の事情のため、研究計画を途中で変更した例が若干生じたが、適切な対応策を立案し、目標は達成している。

この研究課題においては、生物多様性に関するデータベースを構築し、GBIFへデータを提供することを目的としていた。また、研究機関の事情によって、直ちにGBIFにデータ提供を行えない場合には、独自にインターネット上にデータを公開することになっている。この点では上記の6課題の大半が研究終了までにデータ公開を行っており、終了時点で公開できていない少数の例でも短期間のうちに公開できる見込みが立っている。生物多様性に関するデータベース構築には多くの人員と時間が必要であることを考慮すると、参画研究機関は日本からのデータ発信に大いに寄与したと言えるであろう。

多くの課題が標本データや画像データの電子化と公開に重点を置いていたのはGBIFの目的から考えて適切であった。また、生態情報と連携したデータベース構築を行った意欲的な課題もあった。生態情報については、継続的なデータの蓄積が課題ではあるものの、長期観測プロットでの標本情報を提供したことは大いに評価できる。今後は生態学的データやモニタリングデータとの十分なリンクを期待したい。

また、6課題すべてについて言えることであるが、持続的なデータベース構築とメンテナンスが今後の課題となる。データベース構築後に資金や人材を確保し、日本から生物多様性情報を持続的に発信していくことが肝要である。そのためには、環境省移管後も公的な資金を投入する必要があるであろう。